

なぜプラトン『イオン』の対話相手はイオンであるか——詩作、吟誦という解釈的に行いについて——

風戸 美伶 (一橋大学)

---

古代ギリシアの哲学者プラトンの『イオン』では、哲学者であるソクラテスとラプソドスであるイオンとの対話が描かれる。ラプソドスとは、ギリシア中を巡り、ホメロスの詩を吟誦する吟誦詩人である。本対話篇の先行研究は、その主題を詩への批判としてきた。これは、詩人とラプソドスを混同し、両者の違いを明示しない立場である。だが、詩や詩作に対する論駁を目的とするならば、対話相手は、ラプソドスではなく、詩人がふさわしいように思われる。では、なぜプラトン『イオン』の対話相手は、詩人ではなく、ラプソドスのイオンであるか。この問いは、なぜソクラテスはイオンを選んだのか、および、なぜプラトンはイオンを選んだのかという問いに細分化される。本発表は、詩人とラプソドスの違いを明示し、これらの問いに答えることで、対話篇に込められたプラトンの意図を明確化する。

まず、前者の問いに対して、ソクラテスがラプソドスと自らに、ある共通性を見出していたからだと論者は考える。イオンは、技術(τέχνη)かつ知識(ἐπιστήμη)でもって吟誦していると自称する。だが実際には、詩人を介して、彼は、神の分け前(θεία μοῖρα)つまりインスピレーションのようなものを受け取ることで、吟誦していることがソクラテスによって指摘される。ここから、イオンが、神の分け前を直接的ではなく間接的に受け取っていることがわかる。この点において、ソクラテスもイオンと同様の性質を持っていると考えられる。とりわけ、「ソクラテスより賢い者は誰もいない」というデルポイの神託に注目したい。ソクラテスは、神託を巫女や友人のカイレポンを介して受け取っている。その中で、彼は、神との関係性において同じく間接的であるラプソドスこそ、その解釈に長けている可能性があると考えた。これこそ、ソクラテスがイオンと対話を始める動機であるはずだ。

次に、後者の問いに対して、プラトンが、著者である自身とその読者も、ラプソド斯的だと考えたからだと論者は解釈する。プラトンも、ソクラテスを通して神の分け前を受け取り、対話篇を制作しているため、ラプソドスに通じる性格を有する。敷衍するならば、読者もラプソド斯的であると言える。というのも、対話篇を読んだ者は、しばしばその美しさや臨場感に心を震わせるが、その対話を直接見聞きしているわけではないからだ。このように、どのような制作物においても、それに触れる者は、神の分け前が薄まった一解釈を受け取っているにすぎない。そのことを理解していないと、読者もイオンのように、技術かつ知識を有していると思い込んでしまう危険性がある。プラトン

は読者に、この危険性を示すために、詩人ではなくイオンをソクラテスの対話相手に選んだのだろう。そして、本発表を通して、プラトン対話篇について解釈を試みる論者もまた、ラプソド斯的だと結論付けられる。